

SYLLABUS



2021

(令和3年度)

藤華医療技術専門学校
看護学科

I. 教 育 方 針

＜基本理念＞

本学校における看護師養成の基本理念は、医療の基盤となる知識・技術及び態度を学ばせ、豊かな教養と礼儀・感謝の精神を身につけ、広く地域や社会に貢献し、生涯にわたり自己を啓発できる人材を育成することにある。併せて本学園経営の姉妹校との連携を図り、保健・医療・福祉との関連性を深められるようにする。

＜教育目的＞

看護師に必要な知識・技術および態度を習得させるとともに豊かな人間性を養い、保健・医療・福祉の発展に対応できる看護師を育成する。

＜教育目標＞

1. 人間を身体的・精神的・社会的に統合された存在として、幅広く理解する能力を養う。
2. 人々の健康と生活を、自然・社会・文化的環境とのダイナミックな相互作用等の観点から理解する能力を養う。
3. 人々の多様な価値観を認識し専門職業人としての共感的態度及び倫理に基づいた看護を実践できるとともに、最新知識・技術を自ら学び続ける基礎的能力を養う。
4. 人々の健康上の課題に対応するため、科学的根拠に基づいた看護を実践できる基礎的能力を養う。
5. 健康の保持増進、疾患予防と治療、リハビリテーション、終末期など、健康や障害の状態に応じた看護を実践するための基礎的能力を養う。
6. 保健・医療・福祉制度と他職種の役割を理解し、チーム医療を実践するとともに、人々が社会的資源を活用できるよう、それらを調整するための基礎的能力を養う。

＜期待される卒業生像＞

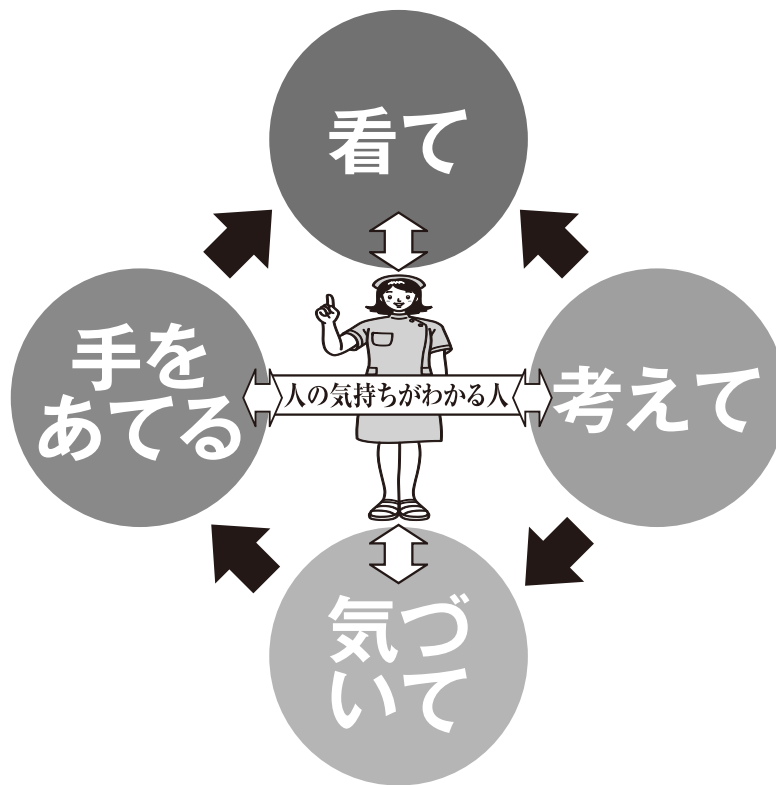
学園の教育方針である「形から心を養う実学教育」を基盤に、医療の専門職業人として人間を尊重し、敬愛し、ケアできる知識・技術を身に付けさせる教育を実践する。

まず、校是である「礼儀」「感謝」「奉仕」をもとに、看護学科では「人の気持ちが変わる人」の育成を目指す。

更に、看護するうえで生じた「なぜ？」を大切にし、その意味を考え、気づき、手をあてることができる看護師の育成を目指す。

「見て、考えて、気づいて、手をあてる」事のできる看護師

「手をあてる」とは
川島みどり先生…「TE・ARTE」
からだに触れる、心に触れる、人格に触れる、コミュニケーション、まなざし、
などなど「手の技」を極める。



<看護教育における基本となる概念>

(人 間)

- ① 十分な「体力」「知識」「生命への愛」を有しているならば、自立した人間として、自分自身の方法で基本的ニーズを充足していく。
- ② 胎生期から老年期および死までのいずれかの成長発達段階にある。
- ③ 生物的・心理的・社会的側面をもつ統一体である。
- ④ 信念・価値観など固有の自己概念をもつ存在である。
- ⑤ 健康の最良の状態から死に至るまでのいずれかのレベルで生きている。
- ⑥ 人間は環境との関係により変化と安定を図りながら適応、成長、発達し生きている。
- ⑦ 人間とは生きた身体、生きた心、身体と心が一体となって表現された感情をもつものである。

(健 康)

- ① 一般的に健康とは病気でない状態をいい、望ましい健康状態とはその人の身体的、精神的機能が十分に発揮され社会に適応している状態である。
- ② 健康の概念は、時代によって変化し個人によって健康状態の認識は異なる。
- ③ 健康は人間の基本的権利であり、健康の維持増進はセルフケアに基づいている。
- ④ 健康とは単に良い状態を指すだけでなく、我々が持てる力を十分に活用できている状態である。

(社会・環境)

- ① 環境とは、生命や生命体の発達に影響を及ぼす外的な状況や作用の全てである。
- ② 環境は、人間との相互作用によって変化し、人間がそれぞれ役割を発揮する場、共同体である。
- ③ 環境は、外部環境（社会環境を含む）と内部環境の階層構造で成り立っている。
- ④ 社会は、人間がよりよく生きるために法律・政治・経済・医療・福祉などの機能と相互関連している。

(看護)

- ① 成長発達段階にある全ての人、ならびにあらゆる健康レベルにある個人または集団を対象とする。
- ② 人間の生命および欲求を守り、生活環境を整え、日常生活への適応を援助し、社会生活ができるように支援することである。
- ③ 対象となる全ての人々の教育、相談、人的・物的環境の調整及び援助を行うことである。
- ④ 地域社会あるいは集団を形成する人々との人間関係を基盤に行うものである。
- ⑤ 対象の看護上の問題を明らかにし、その問題を解決するために系統的に働きかけることである。
- ⑥ 新鮮な空気、陽光、暖かさ、清潔さ、静かさを適切に保ち、食事を適切に選択し管理すること、こういったことの全てを患者の生命力の消耗を最小にするように整えることである。

(教育)

- ① 教育は積極的、意図的に行われ、教育者と学習者による人と人との相互作用で成り立つ教授活動である。
- ② 教育は学習者の行動に価値ある変化をもたらすプロセスである。(行動とは、動作を伴う行為のみを意味するのではなく、知識や理解や技能から態度・習慣のような情意的なものも含めたものをいう)
- ③ 自分の能力を働かせる可能性と、その真理を追究していく方法を判断できるようにすること。
- ④ 教育は、教育者が何かを与えるというものではなく、学習者が本質的にもっている資質を引き出して最大限に能力を発揮させる働きである。

<看護学科カリキュラムの概要>

看護学は、さまざまな生活環境で暮らす人々を理解し、あらゆる健康段階にある個人または集団の健康上の問題を明確にし、よりよい援助の方向を追求する理論と実践の学問である。看護は、健康のあらゆるレベルにおいて個人が健康的に正常な日常生活を送れるように援助することである。その援助の過程では、保健・医療・福祉チームが共同して、対象のそれまでの生活リズムにまで整えることを目指す相互作用の過程をとる。本校のカリキュラムは豊かな人間性の育成と看護実践に関する能力の開発に重点をおき、基礎的能力から専門的能力の養成までを段階別に5つの分野（基礎分野・専門基礎分野・専門分野Ⅰ・専門分野Ⅱ・統合分野）に分類し、系統的に学べるように編成したカリキュラムとなっている。

まず、看護を学ぶ上での土台となる基礎分野においては科学的思考の基盤作りのため論理学・物理学・統計学を設定した。人間と生活・社会の理解を深めるため、心理学・発達論・コミュニケーション論・行動科学・社会学・家族論・教育学を設定した。また、自己の心と体の健康づくりをめざしリラクゼーションも取り入れた。さらに、情報化ならびに国際化する社会に対応するため「情報科学」「英語」を学ぶ。

専門基礎分野では看護の対象である人間を総合的・個別的に理解し、健康と疾病に関する観察力や判断力を育成するため、人体の構造と機能を学ぶ科目として生化学・解剖生理学を設定し、疾病の成り立ちと回復の促進について学ぶ科目として微生物学・病理学・薬理学・栄養学を設定した。解剖学と病理学・薬理学・栄養学は講義で学ぶ知識を看護に必要な知識として統合できるよう解剖生理学演習および臨床病態学演習を行う。また、人々

が生涯を通じて健康や障害の程度に応じた社会資源の活用ができるよう、社会保障制度と生活者の理解を深める科目として保健医療論・公衆衛生学・保健行政論・関係法規・社会福祉Ⅰを設けた。社会福祉については更に社会福祉Ⅱを設け、より理解を深め、実践的に学べるよう演習を行う。

専門職としての基礎を形作る専門分野では、全ての看護学の基盤となる基礎看護学を専門分野Ⅰとし、あらゆる看護場面に共通する概念・理論・基礎的知識や技術を学ぶ。次に、人間の発達段階と人間のライフステージや対象の特性に応じた看護である小児看護学・成人看護学・老年看護学・母性看護学・精神看護学を専門分野Ⅱとした。ここでは、成長発達に応じた各期の特徴とその健康上の問題を明らかにし、その多様なニーズや特徴を踏まえながら、対象に応じた看護が実践できる基礎的能力を育成する内容とした。

統合分野では、基礎分野から専門分野Ⅱまでで学んだ内容を臨床実践で活用するため、一般臨床あるいは在宅療養などの現場における臨床実務に近い環境の中で看護を提供する方法を学ぶ。既習の知識・技術を統合し対象の状態に応じた看護を実践する能力および看護を総合的に評価する能力を養うための科目として看護の統合と実践という科目を設定し、看護管理・医療安全・国際社会と看護・災害看護・救急看護・臨床看護技術Ⅰ・Ⅱを学ぶ。また、在宅看護論として社会の幅広い領域であらゆる健康レベルとライフステージにある個人・集団に対する看護の方法を学ぶ。

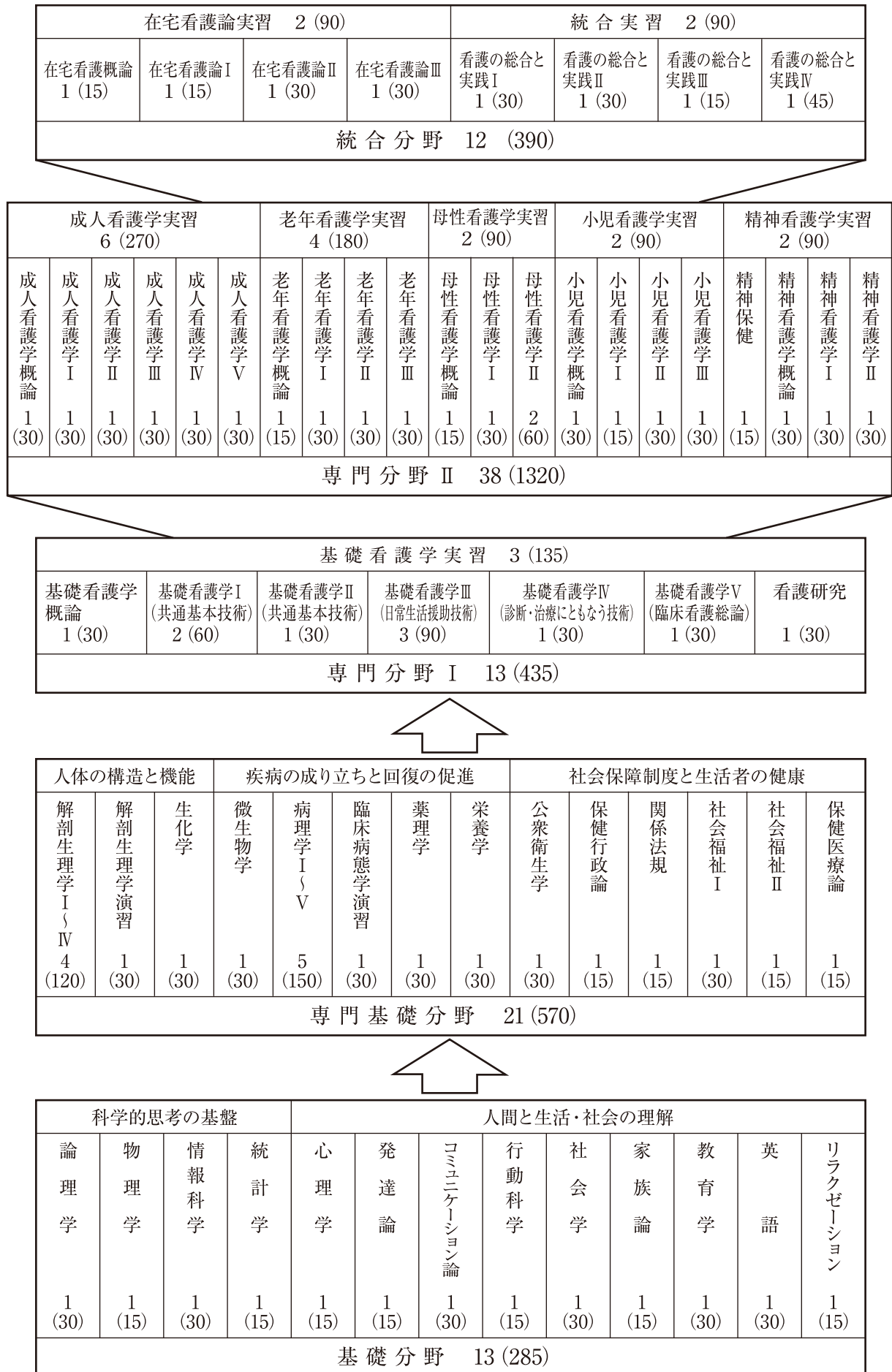
専門分野Ⅰ・Ⅱおよび統合分野ではそれぞれの領域において講義、演習、実習の過程を通して基礎的实践能力を育成し、理論と実践の統合を図る。

教育課程

	教 育 内 容	指定規則 単位数	学 則		教 科
			単 位	時 間	
基礎分野	科学的思考の基盤	13	1	30	論理学
			1	15	物理学
			1	30	情報科学
			1	15	統計学
	人間と生活・社会の理解		1	15	心理学
			1	15	発達論
			1	30	コミュニケーション論
			1	15	行動科学
			1	30	社会学
			1	15	家族論
			1	30	教育学
			1	30	英語
			1	15	リラクゼーション
	小 計		13	13	285
専門基礎分野	人体の構造と機能	15	1	30	解剖生理学Ⅰ
			1	30	解剖生理学Ⅱ
			1	30	解剖生理学Ⅲ
			1	30	解剖生理学Ⅳ
			1	30	解剖生理学演習
			1	30	生化学
	疾病の成り立ちと回復の促進		1	30	微生物学
			1	30	病理学Ⅰ
			1	30	病理学Ⅱ
			1	30	病理学Ⅲ
			1	30	病理学Ⅳ
			1	30	病理学Ⅴ
			1	30	臨床病態学演習
			1	30	薬理学
			1	30	栄養学
			1	30	公衆衛生学
	健康支援と社会保障制度		1	15	保健行政論
			1	15	関係法規
			1	30	社会福祉Ⅰ
			1	15	社会福祉Ⅱ
			1	15	保健医療論
小 計	21	21	570		
専門分野Ⅰ	基礎看護学	10	1	30	看護学概論
			2	60	基礎看護学Ⅰ
			1	30	基礎看護学Ⅱ
			3	90	基礎看護学Ⅲ
			1	30	基礎看護学Ⅳ
			1	30	基礎看護学Ⅴ
			1	30	看護研究
	臨地実習 基礎看護学実習	3	1	45	基礎看護学実習Ⅰ
			2	90	基礎看護学実習Ⅱ
小 計	13	13	435		

	教育内容	指定規則 単位数	学 則		教 科
			単 位	時 間	
専 門 分 野 Ⅱ	成人看護学	6	1	30	成人看護学概論
			1	30	成人看護学Ⅰ
			1	30	成人看護学Ⅱ
			1	30	成人看護学Ⅲ
			1	30	成人看護学Ⅳ
			1	30	成人看護学Ⅴ
	老年看護学	4	1	15	老年看護学概論
			1	30	老年看護学Ⅰ
			1	30	老年看護学Ⅱ
			1	30	老年看護学Ⅲ
	小児看護学	4	1	30	小児看護学概論
			1	15	小児看護学Ⅰ
			1	30	小児看護学Ⅱ
			1	30	小児看護学Ⅲ
	母性看護学	4	1	15	母性看護学概論
			1	30	母性看護学Ⅰ
			2	60	母性看護学Ⅱ
	精神看護学	4	1	15	精神保健
			1	30	精神看護学概論
			1	30	精神看護学Ⅰ
			1	30	精神看護学Ⅱ
	臨地実習 成人看護論 老年看護論 小児看護論 母性看護論 精神看護論	6	2	90	成人看護学実習Ⅰ
			2	90	成人看護学実習Ⅱ
			2	90	成人看護学実習Ⅲ
		4	2	90	老年看護学実習Ⅰ
			2	90	老年看護学実習Ⅱ
		2	2	90	小児看護学実習Ⅰ
		2	2	90	母性看護学実習
		2	2	90	精神看護学実習
	小 計	38	38	1,320	
統 合 分 野	在宅看護論	4	1	15	在宅看護概論
			1	15	在宅看護論Ⅰ
			1	30	在宅看護論Ⅱ
			1	30	在宅看護論Ⅲ
	看護の統合と実践	4	1	30	看護の統合と実践Ⅰ
			1	30	看護の統合と実践Ⅱ
			1	15	看護の統合と実践Ⅲ
			1	45	看護の統合と実践Ⅳ
	臨地実習 在宅看護論 看護の統合と実践	2	2	90	在宅看護論実習
		2	2	90	統合実習
	小 計	12	12	390	
合 計		97	97	3,000	

Ⅱ. 看護教育課程の構造図



Ⅲ. 学年到達目標

1 年	2 年	3 年
(認知領域) 1. 新しい学習環境の中で、自己の学習習慣を確立し、学習活動ができる。 1) 学習の目標を自分で決定し、継続的に学習する習慣を身につけることができる。 2) 専門分野で得た知識を自分に合った方法で整理することができる。 3) 看護に興味を持つことができる。	1. 専門領域において、問題解決能力を活用し、看護の視点を明確にすることができる。 1) 講義で得た知識を相互に関連させて理解し、その内容を自分に合った方法で整理することができる。 2) 専門領域での自己の学習状態（思考力・理解力・学習意欲）を客観的に分析し、他者の助言を得て学習を進めることができる。 3) 学習の目標を明確にし、自分で意思決定をしてから、計画的に学習する習慣を身につけることができる。 4) 対象の身体面・心理面・社会面を総合的にとらえ、立案評価するプロセスの基本を身につけることができる。	1. 既習の知識を実習において統合し、看護援助の根拠を明確にすることができる。 1) 対象の発達段階から健康障害が及ぼす影響と、社会的な役割からくる問題を総合的に理解し、自立と回復に向けた援助を考えることである。 2) 専門・関連分野の知識を活用し、生活者の視点で援助を考えることができる。 3) 対象のニーズの充足、自立と回復の程度、満足度から実施した援助を客観的に評価、修正する必要がある。
(情意領域) 1. 自己の傾向を知り、相手の立場に立って物事を考えることができる。 2. 友人・家族・教員と円滑な人間関係を築き、メンバースhipを発揮することができる。 3. 社会の一員としての自覚を持ち、マナーある行動をとることができる。 1) 新しい環境に応じた生活習慣を身につけることができる。 2) 報告・連絡・相談を自ら行うことができる。 4. 看護師を目指す者として、健康管理を積極的に行う。	1. 学校行事や課外活動を通して、友人や家族及び様々な人達と円滑な人間関係を築き、リーダースhipを発揮することができる。 1) 他者との関わりの中で、相手の感情を感じ取り、支援することができる。 2) 自己を客観的に分析することができる。 2. 自己の健康状態を把握し、対処することができる。 3. 社会の一員としての自覚を持ち、マナーある行動を取り、他者に指導することができる。	1. 看護学生として医療チームの一員であるという自覚を持ち責任のある態度をとることができる。 2. 対象の尊厳を守り、その人の価値観を尊重する態度を身に身につけることができる。 3. 自己の健康管理ができ、周りの人々の健康に配慮し、対処方法を指導することができる。 4. 自己の行動を振り返り自己を高める姿勢を身につける。 5. 実習を通して看護に対する考えを深めることができる。
(精神運動領域) 1. 対象の基本的ニーズにあった日常生活援助を原理・原則に基づいて実践することができる。 2. 援助の途中で声かけをし、対象の反応を確認しながら実践することができる。 3. 対象の不安や苦痛を最小限にするように配慮できる。	1. 対象の健康障害や基本的ニーズにあった日常生活援助を実践することができる。 2. 対象の意思を尊重し、相手のペースに合わせた日常生活援助を実践することができる。 3. 対象のニーズの充足、満足度から実施した援助を評価することができる。	1. 対象の発達段階や健康障害をアセスメントし、基本的ニーズにあった日常生活援助を原理、原則に基づいて実践することができる。 2. 対象の身体、心理、社会面を総合的に理解し、自立と回復に向けた日常生活援助を実践することができる。 3. 対象のニーズの充足、自立と回復の程度、満足度から実施した援助を評価、修正することができる。 4. 対象に実施した援助を評価し、必要に応じて援助計画を修正し、実践することができる。

〈ヤル気〉を起こして可能性に挑戦してみよう

看護学の理論と実践の追求や、国家試験合格を目指して、学生諸君が日頃どんな心掛けで取り組む必要があるのか、感じた要点をあげ参考に供したい。

1. 自分の個性を生かし、もてる力を最大限に発揮してみよう

案外と自分を正しくつかむことはむづかしい。自分にはわからないが、他人にはわかる部分がある。できるだけ自分の未知の部分減らして、自分の能力・適性をつかみながら個性を生かして、自己啓発に努めることである。教師の指導・助言をよく聞き、また友人の忠告などを素直に受け入れて、自分の長所・短所を正しくつかみ、自分のもてる力を最大限に伸ばしてみよう。

2. 目標を設定して、計画的に勉強をしてみよう

何を、いつまでに、どの程度勉強するか等の上手な目標設定のポイントを考えて取り組んでみることだ。特に「いつまでに」達成するかの設定では、ややもすると“いつかやればいいや”とか“テスト前にやればなんとかなる”と構えていては、理解も進歩もありえない。「どの程度」の水準達成が必要かは、各科目の目標をよく考え、成功率を判断して決めることが必要だ。計画・実践・評価を繰り返しながら、計画的に勉強してみよう。

3. 時間を支配しながら、毎日の勉強を習慣化してみよう

一日は24時間、限られた時間をいかに有効に活用するかだ。各人に適した毎日の生活のリズムがあるはず。一日の時間帯の中で最も集中的に勉強できる時間をコア（核）時間とすれば、これをできるだけ多くして毎日をどのように習慣化できるかが大切だ。日々を振り返ってみると、アキ時間、ロス時間の多いことに気づくものだ。自らの時間を支配しながらコア時間を確保するように習慣化してみよう。

4. 反復と根気で日々を充実し、実力をつけるように努めてみよう

講義や実習で理解力を高め実力をつけるためには、反復（ドリル）の度合いが結果を決める。二度・三度と反復すれば確実に理解して実力がつく。反復には根気強い学習意欲が必要だ。毎日の予習・復習を確実に習慣化して、日々を充実してみよう。「日々充実」の生活リズムの中で、「ゆとり」の時間が生まれる。反復と根気で理解力を高め、実力をつけるように心掛けてみよう。

5. ヤル気を起こして幸福感や満足感を味わい、自己確立に努めてみよう

人間の幸福や満足とは何かを考えてみたことがあるか。例えば能力の問題を取り上げてみても、能力の高低や総量は幸福や満足には直接関係しないと思っている。それは成長の度合いが決め手であって、理解度を深めることで興味・関心が沸き、学習の実践行動が活発になる。それとともに知識や技術等が充実へ向かい、幸福や満足が味わえる。

人間を成長させ自己確立を目指すためには、ヤル気で決まるように思われる。自ら課題をみつけ、自ら学び、考え、問題を解決する能力を養うように心掛けてみよう。自立性が確立し、自信をつけ〈ヤル気〉が起こると、おのずと資質は向上して、幸福感や満足感を味わうことができる。〈ヤル気〉を起こして自己確立に努めてみよう。

日々充実、〈ヤル気〉を起こして可能性に向かって挑戦してみよう。

基礎分野

基礎分野の考え方

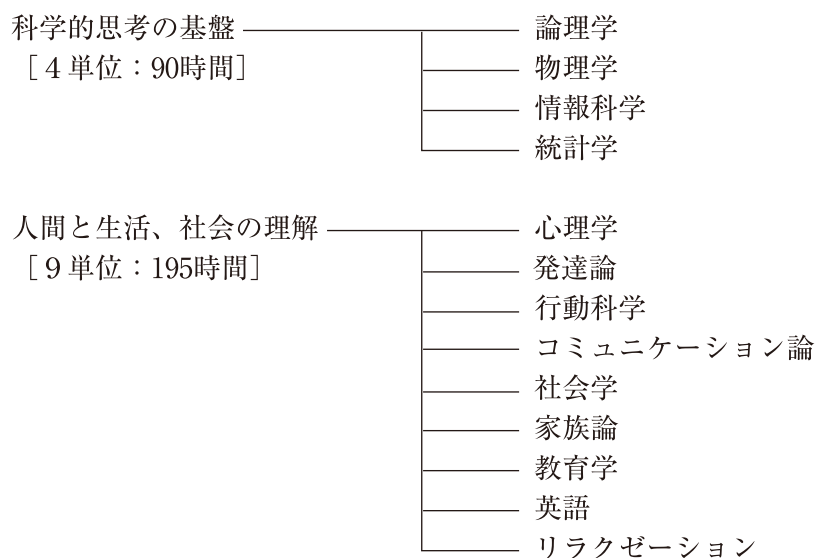
基礎分野は、専門基礎分野、専門分野の基礎となる分野であり「科学的思考の基盤」「人間と生活・社会の理解」の2つの内容で構成する。

基礎分野を構成する各教科目を学習する目的は、科学的思考力を身につけること及びコミュニケーション能力を高め、感性を磨き、自由で主体的な判断と行動がとれることにある。

「科学的思考の基盤」として論理学・物理学・情報科学・統計学を学ぶ。中でも、物理学は、看護技術の根拠となる基礎的な内容を学ぶ。

「人間と生活・社会の理解」として発達論・行動科学・コミュニケーション論・社会学・教育学・英語・リラクゼーションを学ぶ。特に人間関係論では、人間関係の基礎としてのコミュニケーションに関する内容を含めて学ぶ。また、国際化、情報化への対応のため、英語では基礎的な英語のコミュニケーション、臨床に役立つ医学英語を学ぶ。リラクゼーションをとおして心と体の健康づくりを目指す。

<基礎分野の構成>



	科目名	単位数(時間数)	開講時期	授業方法
基礎分野	論 理 学	1 (30)	1 年前期	講義
担当教員	神崎英紀			

1. 授業概要

看護を展開していくため、原因と結果・現象とその解釈について論理的に考え正確に伝えるための基盤となる能力を養う。

2. 到達目標

- 1) 基本的な文章の書き方がわかる。
- 2) 事実・状況を文章および言葉で的確に伝えることができる。
- 3) 論理的な筋道の通った文章が書ける。

3. 内容

- 1) 文章の読解
- 2) 文章を書く力
- 3) 文章を書く手順
 - ① 動機 ② 主題 ③ 材料 ④ 構想 ⑤ 叙述 ⑥ 推敲
- 4) レポート、小論文の書き方
 - ① 主語、述語の関係 ② ワンセンテンス ③ 句読点 ④ 文体、用語 ⑤ 段落
 - ⑥ 文章構成の型 ⑦ 文章展開の型
- 5) 添削指導

4. 授業計画

コマ	内 容
1～2	文章の読解
3～5	文章を書く力
6～9	文章を書く手順
	①動機 ②主題 ③材料 ④構想 ⑤叙述 ⑥推敲
10～13	レポート、小論文の書き方
	①主語、述語の関係 ②ワンセンテンス ③句読点
	④文体、用語 ⑤段落 ⑥文章構成の型 ⑦文章展開の型
14～15	添削する指導

5. 評価方法

終講試験（100点満点）によって行う。100点満点で表された成績を、100～90点、89～80点、79～70点、69～60点、60点未満の5段階に分割し、上位よりS、A、B、C、Dの評定とする。ただし、受講途中で中止した場合は評定不能とし、Fで表す。

6. テキスト・参考文献

＜使用テキスト＞ なし

＜参考文献＞ 医療・看護に関する文献・論文・新聞記事・コラムなど、必要に応じて関連の書籍を紹介する。

基礎分野	科 目 名	単位数(時間数)	開講時期	授業方法
	物 理 学	1 (15)	1 年前期	講義
担当教員	島田隆樹			

1. 授業概要

医療の現場ではこれまでに見出されている種々な物理現象や法則を機器や手法に有効活用しながら、診察・検査・治療・リハビリなどを行っている。その中で看護に携わる者として知らねばならない（または、知ることによって有効な手法となる）、力学などを学ぶ。
それにより看護者は勿論のこと、治療や介護を受ける者にとっても痛みや負担を軽減することができ、色々な治療効果も向上する。此处では医療の現場、特に看護に役立つ様々な機器の動作原理やその活用の仕方を物理学的見地から学ぶ。

2. 到達目標

看護の現場に生かすために必要な知識とそれを応用する力を養う。

3. 内容

1) 力とは何か

2) 力の合成と分解

3) 力と重心

4) 力とエネルギー

5) 力と仕事量、効率

6) 圧力と浮力

7) 日常生活と医療現場で用いる道具や機器

8) バイオメカニクス

4. 授業計画

コマ	内 容
1	力とは何か
2	力の合成と分解
3	力と重力
4	力とエネルギー
5	力と仕事量、効率
6	圧力と浮力
7	日常生活と医療現場で用いる道具や機器
8	バイオメカニクス

5. 評価方法

終講試験（100点満点）によって行う。100点満点で表された成績を、100～90点、89～80点、79～70点、69～60点、60点未満の5段階に分割し、上位よりS、A、B、C、Dの評定とする。ただし、受講途中で中止した場合は評定不能とし、Fで表す。

6. テキスト・参考文献

<使用テキスト> 物理学：メヂカルフレンド社

<参考文献> Newベッドサイドを科学する 看護に生かす物理学（平田雅子著）：学研理科年表（国立天文台編）：丸善（机上版 2,600円、ポケット版1,400円）

基礎分野	科 目 名	単位数(時間数)	開講時期	授業方法
	情 報 科 学	1 (30)	1 年前期 ～後期	講義、演習
担当教員	吉岡 孝			

1. 授業概要

コンピュータによる情報処理の実際を学ぶことによって、情報リテラシーの育成をはかる。

2. 到達目標

情報科学の基礎理論と、コンピュータによる基本的な操作能力を習得する。

3. 内容

1) パソコンの基本操作

2) ワードプロソフトによる文章作成

3) 表計算ソフトの使い方

4) プレゼンテーションの方法

5) ホームページの見方とメールの使い方

6) 情報検索の方法

7) 病院情報システムについて

4. 授業計画

コマ	内 容
1	パソコンの基本操作
2～3	ワードプロソフトによる文章作成
4～5	表計算ソフトの使い方
6～7	プレゼンテーションの方法
8～10	ホームページの見方とメールの使い方
11～13	情報検索の方法
14～15	病院情報システムについて

5. 評価方法

終講試験（100点満点）によって行う。100点満点で表された成績を、100～90点、89～80点、79～70点、69～60点、60点未満の5段階に分割し、上位よりS、A、B、C、Dの評定とする。ただし、受講途中で中止した場合は評定不能とし、Fで表す。

6. テキスト・参考文献

<使用テキスト>

なし

<参考文献>

看護・医療のための情報科学入門（椎橋 実智男著）：医学芸術社

ヘルスケア情報学入門（辻 和男著）：金原出版

基礎分野	科 目 名	単位数(時間数)	開講時期	授業方法
	統 計 学	1 (15)	2 年後期	講義、演習
担当教員	小野 宏			

1. 授業概要

確率・統計とはどのようなもので、それが日常生活、医療・保健従事者とどのように関わっているかを学び、医学分野におけるデータを図や表に示された時その数字は何を意味するかを読み取る能力を養い、科学的な論理と思考の基本および看護研究を行うための基礎能力を養うことをねらいとする。

2. 到達目標

確率の基礎および統計処理の仕方、概要について学ぶ。

3. 内容

1) 統計学入門

2) 統計データのまとめ方

3) 確率分布と推定

4) 統計学的検定

5) 疫学と統計学

6) 保健統計の実際

4. 授業計画

コマ	内 容
1	統計学入門
2	統計データのまとめ方
3	確率分布と推定
4～5	統計学的検定
6～7	疫学と統計学
8	保健統計の実際

5. 評価方法

終講試験（100点満点）によって行う。100点満点で表された成績を、100～90点、89～80点、79～70点、69～60点、60点未満の5段階に分割し、上位よりS、A、B、C、Dの評定とする。ただし、受講途中で中止した場合は評定不能とし、Fで表す。

6. テキスト・参考文献

<使用テキスト>

なし（適宜プリント使用する）

<参考文献>

エビデンスのための看護研究の読み方・進め方：中山書店
系統看護学講座 基礎分野 統計学：医学書院
看護、医療系のための情報科学入門

基礎分野	科 目 名	単位数(時間数)	開講時期	授業方法
	心 理 学	1 (15)	1 年前期	講義
担当教員	長谷川 美枝子			

1. 授業概要

心のしくみについて学び自己や他者の心理を理解することは、社会人としてまた医療従事者として必要なことである。ここでは、人の心理を理解するための基礎的知識を学ぶ。

2. 到達目標

心理学一般の根本原理を知ることができる。

3. 内容

1) 人間とは

2) 記憶

3) 感覚、知覚

4) 思考、想像、言語

5) 知能、学習

6) 感情、情緒、情操

7) 適応

8) 性格

9) 集団の心理

4. 授業計画

コマ	内 容
1	人間とは、記憶
2	感覚、知覚
3	思考、想像、言語
4	知能、学習
5	感情、情緒、情操
6	適応
7	性格
8	集団の心理

5. 評価方法

終講試験（100点満点）によって行う。100点満点で表された成績を、100～90点、89～80点、79～70点、69～60点、60点未満の5段階に分割し、上位よりS、A、B、C、Dの評定とする。ただし、受講途中で中止した場合は評定不能とし、Fで表す。

6. テキスト・参考文献

<使用テキスト> 系統看護学講座 基礎6 心理学：医学書院

<参考文献>

基礎分野	科 目 名	単位数(時間数)	開講時期	授業方法
	発 達 論	1 (15)	1 年前期	講義
担当教員	山崎清男			

1. 授業概要

人間の身体的・心理的・社会的側面の統合体としてとらえ、発達という観点から理解する。

2. 到達目標

発達理論をふまえ、乳幼児期から老年期までの各発達段階における心身の特徴と発達課題について理解できる。

3. 内容

1) 発達論

各発達段階の心身の特徴と発達課題

①乳幼児期 ②青年期 ③児童期 ④成人期 ⑤思春期 ⑥老年期

4. 授業計画

コマ	内 容
1	発達論
2	各発達段階の心身の特徴と発達課題 ①乳幼児期
3	②青年期
4	③児童期
5～6	④成人期
7	⑤思春期
8	⑥老年期

5. 評価方法

終講試験（100点満点）によって行う。100点満点で表された成績を、100～90点、89～80点、79～70点、69～60点、60点未満の5段階に分割し、上位よりS、A、B、C、Dの評定とする。ただし、受講途中で中止した場合は評定不能とし、Fで表す。

6. テキスト・参考文献

<使用テキスト> なし 必要に応じてプリントを配布する

<参考文献> 適宜、紹介する

基礎分野	科 目 名	単位数(時間数)	開講時期	授業方法
	行 動 科 学	1 (15)	1 年前期	講義・演習
担当教員	麻生良太			

1. 授業概要

社会学、人類学、教育学等、学際的特質を有する行動科学について、その中心領域である心理学の視座から人間行動の生起、変容のメカニズムを学び、人間理解につなげる。

2. 到達目標

- 1) 人間と人間行動について行動心理学・人間性心理学の立場から分析し、基本的理解を図る。
- 2) 集団行動・対人関係について集団力学の研究的成果を拠り所に考察し、基本的理解を図る。

3. 内容

- 1) レヴィン・ワトソン・トールマンの行動理論
- 2) 人間観・動因・誘因・認知と行動
- 3) 心的エネルギーの2つの方向
- 4) 集団力学の方法、集団規範と集団雰囲気の規定要因とその測定法
- 5) 対人関係の基本軸、バランス理論と討論法

4. 授業計画

コマ	内 容
1	レヴィン・ワトソン・トールマンの行動理論
2～3	人間観・動因・誘因・認知と行動
4～5	心的エネルギーの2つの方向
6～7	集団力学の方法、集団規範と集団雰囲気の規定要因とその測定法
8	対人関係の基本軸、バランス理論と討論法

5. 評価方法

終講試験（100点満点）によって行う。100点満点で表された成績を、100～90点、89～80点、79～70点、69～60点、60点未満の5段階に分割し、上位よりS、A、B、C、Dの評定とする。ただし、受講途中で中止した場合は評定不能とし、Fで表す。

6. テキスト・参考文献

＜使用テキスト＞ なし 講師の作成したレジュメ
 ＜参考文献＞

基礎分野	科 目 名	単位数(時間数)	開講時期	授業方法
	コミュニケーション論	1 (30)	1 年前期	講義・演習
担当教員	生山留美			

1. 授業概要

看護において良好な人間関係を構築するためにコミュニケーション能力は不可欠な要素である。人間観を基本に人間関係の望ましい有り方について理解を深めるとともに、コミュニケーション能力の育成をはかる。

2. 到達目標

1) 人間関係についての基礎知識を得る。

2) コミュニケーションに関する理解を深めることができる。

3) 個人および集団における交流の在り方の理論・方法・技術が理解できる。

3. 内容

1) 人間関係とは何か、人間関係の基本的概念、自己と他者、関与者としての自己

2) 対人関係・行動と社会との関係・家庭・職場・ソーシャルサポートネットワーク

3) 人間関係の本質とケア、援助関係の歴史的変遷および生命へのアプローチ

4) コミュニケーションの構造・機能とその障害、対人感情と共感・言語の機能

5) カウンセリングの理論・方法・技術

6) 人間関係のスキルトレーニング、感受性訓練、カウンセリング実習・自己変容

4. 授業計画

コマ	内 容
1～2	人間関係とは何か、人間関係の基本的概念、自己と他者、関与者としての自己
3～4	対人関係・行動と社会との関係・家庭・職場・ソーシャルサポートネットワーク
5～7	人間関係の本質とケア、援助関係の歴史的変遷および生命へのアプローチ
8～10	コミュニケーションの構造・機能とその障害、対人感情と共感言語の機能
11～13	カウンセリングの理論・方法・技術
14～15	人間関係のスキルトレーニング、感受性訓練、カウンセリング実習・自己変容

5. 評価方法

終講試験（100点満点）によって行う。100点満点で表された成績を、100～90点、89～80点、79～70点、69～60点、60点未満の5段階に分割し、上位よりS、A、B、C、Dの評定とする。ただし、受講途中で中止した場合は評定不能とし、Fで表す。

6. テキスト・参考文献

<使用テキスト> なし（プリント配布）

<参考文献> 系統看護学講座 基礎分野 人間関係論：医学書院
看護とカウンセリング（吉田 哲著）：メディカ出版
カウンセリングの技術（友田不二男著）：誠信書房
カウンセリングの実践（工藤和仁著）：日本カウンセリングセンター

基礎分野	科 目 名	単位数(時間数)	開講時期	授業方法
	社 会 学	1 (30)	1 年前期	講義
担当教員	山本 勝			

1. 授業概要

人間は社会の中に存在し、人間と社会は強い相互作用をもっている。人と社会のしくみや現在社会の特徴を学び、看護の対象である人の理解につなげたい。

2. 到達目標

複雑化する現代社会の構造と機能についての社会的考察を通し、医療における社会的行為、特に健康への希望切なる人々はもとより、少子高齢化社会における看護師の姿勢について学習し、これに対応しうる優能な人材を育成する。

3. 内容

1) 人間と社会

・人間とは何か ・社会的弱者 ・個人と社会

2) 家族

3) 地域社会

・地域社会における生活とその変化 ・地域社会の発展 ・農村社会と都市社会

4) 現代社会と現在文化

5) 社会問題

4. 授業計画

コマ	内 容
1～4	人間と社会 ・人間とは何か ・社会的弱者 ・個人と社会
5～6	家族
7～10	地域社会 ・地域社会における生活とその変化 ・地域社会の発展 ・農村社会と都市社会
11～13	現代社会と現在文化
14～15	社会問題

5. 評価方法

終講試験（100点満点）によって行う。100点満点で表された成績を、100～90点、89～80点、79～70点、69～60点、60点未満の5段階に分割し、上位よりS、A、B、C、Dの評定とする。ただし、受講途中で中止した場合は評定不能とし、Fで表す。

6. テキスト・参考文献

＜使用テキスト＞ なし（プリント配布）

＜参考文献＞ 適宜紹介する

基礎分野	科 目 名	単位数(時間数)	開講時期	授業方法
	家 族 論	1 (15)	1 年後期	講義
担当教員	岡田正彦			

1. 授業概要

激しい社会変化の中で家族を取りまく環境も大きく変わり、様々な家族の問題が生じている。また、画一的な家族観が機能しなくなり、新しい「家族」を創造し発達させることが求められている。そこで、現代の家族の状況とそれを取り巻く諸問題を概観し、創造すべき家族のあり方について検討する。

2. 到達目標

家族に関する基礎知識を学ぶとともに、家族の問題を自らの生涯設計の中で現実的問題として捉え、検討することにより、家族に関わる知識・技能及び態度の向上を試みる。

3. 内容

1) 家族のとらえ方

2) 家族の構成要素

3) 家族の機能

4) 家族と社会

5) 学習課題としての家族

4. 評価方法

コマ	内 容
1	家族のとらえ方
2～3	家族の構成要素
4～5	家族の機能
6～7	家族と社会
8	学習課題としての家族

5. 評価方法

終講試験（100点満点）によって行う。100点満点で表された成績を、100～90点、89～80点、79～70点、69～60点、60点未満の5段階に分割し、上位よりS、A、B、C、Dの評定とする。ただし、受講途中で中止した場合は評定不能とし、Fで表す。

6. テキスト・参考文献

<使用テキスト>

テキストは使用しない。また、プリント等を必要に応じ配付する。

<参考文献>

関係する書物を適宜紹介する。

基礎分野	科 目 名	単位数(時間数)	開講時期	授業方法
	教 育 学	1 (30)	2 年前期	講義
担当教員	伊藤安浩			

1. 授業概要

「教育」はすべての人間に関係する事柄でありながら、一般的には、それが自覚的・反省的な考察の対象となる機会は決して多くはない。本講義は、人間の成長・発達にとっての「教育」の本来的な意義について理解すること、そして、教育的な観点から子ども・人間という存在を理解することをねらいとする。

2. 到達目標

「教育」について理解する際の興味深い視点を提供してくれるのが、人間の原型と考えられる「子ども」という存在である。子どもは一般に「未成熟」な存在と見なされているが、それは、ある意味では最大の「成長・発達の可能性」を秘めた存在であるということである。このような視点を出発点としての、現代の複雑な「教育」の諸問題を読み解いていくことを通して、人間の成長・発達にとっての「教育」の本来的な意義を理解し、さらに、子ども理解・人間理解についての基礎的な資質や態度を養うことを目標とする。

3. 内容

- 1) 「教育」の現状の批判的検討
- 2) 語源から見た「教育」
- 3) 人間の成長・発達に対する「未成熟」の意味
- 4) アダムソン『野生のエルザ』とイタール『アヴェロンの野生児』の二つの事例に見る、人間の成長・発達に対する「教育」の意義
- 5) 歴史的・社会的な文脈における「子ども」
- 6) アメリカとの比較における日本の「子ども」観の特徴
- 7) 「子ども」の成長・発達に対する「家族」の意義

4. 授業計画

コマ	内 容
1	「教育」の現状と批判的検討
2	語源から見た「教育」
3～4	人間の成長・発達に対する「未成熟」の意味
5～7	アダムソン『野生のエルザ』とイタール『アヴェロンの野生児』の2つの事例に見る、人間の成長・発達に対する「教育」の意義
8～10	歴史的・社会的な文脈における「子ども」
11～13	アメリカとの比較における日本の「子ども」観の特徴
14～15	「子ども」の成長・発達に対する「家族」の意義

5. 評価方法

終講試験（100点満点）によって行う。100点満点で表された成績を、100～90点、89～80点、79～70点、69～60点、60点未満の5段階に分割し、上位よりS、A、B、C、Dの評定とする。ただし、受講途中で中止した場合は評定不能とし、Fで表す。

6. テキスト・参考文献

＜使用テキスト＞ なし

＜参考文献＞

	科 目 名	単位数(時間数)	開講時期	授業方法
基礎分野	英 語	1 (30)	1 年前期	講義
担当教員	橋本 美喜男			

1. 授業概要

国際化が進む医療の世界で、世界共通語としての英語の基礎学力を身につけるとともに基本的なコミュニケーション能力を養う。また、看護専門職の仕事に役立たせるため、看護師として知っておくべき医学英語を学ぶ。

2. 到達目標

英検2級レベル程度の基礎的コミュニケーション能力を身につける。
実際の看護の現場で用いられている医学英語を理解する。

3. 内容

1) 英語の子音と母音の聞き取りと発音
2) 「起きる」「御飯を食べる」等の日常の行為を英語で表現する。
3) 身体の部位や病名を英語で表現する。
4) 「体温を測る」「注射をする」等の看護における行為を英語で表現する。

4. 評価方法

コマ	内 容
1～3	英語の子音と母音の聞き取りと発音
4～7	「起きる」「御飯を食べる」等の日常の行為を英語で表現する。
8～11	身体の部位や病名を英語で表現する。
12～15	「体温を測る」「注射をする」等の看護における行為を英語で表現する。

5. 評価方法

終講試験（100点満点）によって行う。100点満点で表された成績を、100～90点、89～80点、79～70点、69～60点、60点未満の5段階に分割し、上位よりS、A、B、C、Dの評定とする。ただし、受講途中で中止した場合は評定不能とし、Fで表す。

6. テキスト・参考文献

<使用テキスト> Because We Care-English for Healthcare Professionals
(井上真紀、井原正)：センゲージラーニング

<参考文献>

基礎分野	科 目 名	単位数(時間数)	開講時期	授業方法
	リラクゼーション	1 (15)	1 年前期	講義・実技
担当教員	岡田理絵			

1. 授業概要

自己の身体機能の調整や増進について学び、ウェルネスを保つことができる。また、メンタルヘルス教育の実践をとおして「心とからだの健康づくり」をはかる。

2. 到達目標

「自分のからだの再発見」、「自分への気づき」によって、自分自身のからだを大切にするセルフケア能力や生き生きとした自分の感情を発見し、本当の自分を回復することを目標とする。

3. 内容

1) リラックス法

・二人のためのリラックス法

・全身リラックス法

2) コミュニケーションの発見

3) 筋リラクゼーション

4) 自立訓練法

5) 呼吸法

4. 授業計画

コマ	内 容
1	リラックス法 ・二人のためのリラックス法 ・全身リラックス法
2～3	コミュニケーションの発見
4～5	筋リラクゼーション
6～7	自立訓練法
8	呼吸法

5. 評価方法

終講試験（100点満点）によって行う。100点満点で表された成績を、100～90点、89～80点、79～70点、69～60点、60点未満の5段階に分割し、上位よりS、A、B、C、Dの評定とする。ただし、受講途中で中止した場合は評定不能とし、Fで表す。

6. テキスト・参考文献

<使用テキスト> なし

<参考文献>